



第1章 大阪狭山市の概要

1. 地理的環境・自然環境
2. 社会的状況
3. 歴史的背景

(1) 地理的環境

本市は、大阪府の東南部に位置し、市域の中心部は東経 135 度 33 分、北緯 34 度 30 分にあります。市域の広がり、東西の最大幅 2.4 キロメートル、南北 7.0 キロメートルで、面積は 11.92 平方キロメートルです。北・西は堺市、東は富田林市、南は河内長野市と接しています。大阪府内の市町村で 5 番目に面積の小さな市です。

また、大阪市の中心部から 20 キロメートル圏に位置し、市内には南海電気鉄道高野線の三つの駅（狭山駅・大阪狭山市駅・金剛駅）があります。大阪市の中心部にある難波駅とは約 25 分で結ばれています。

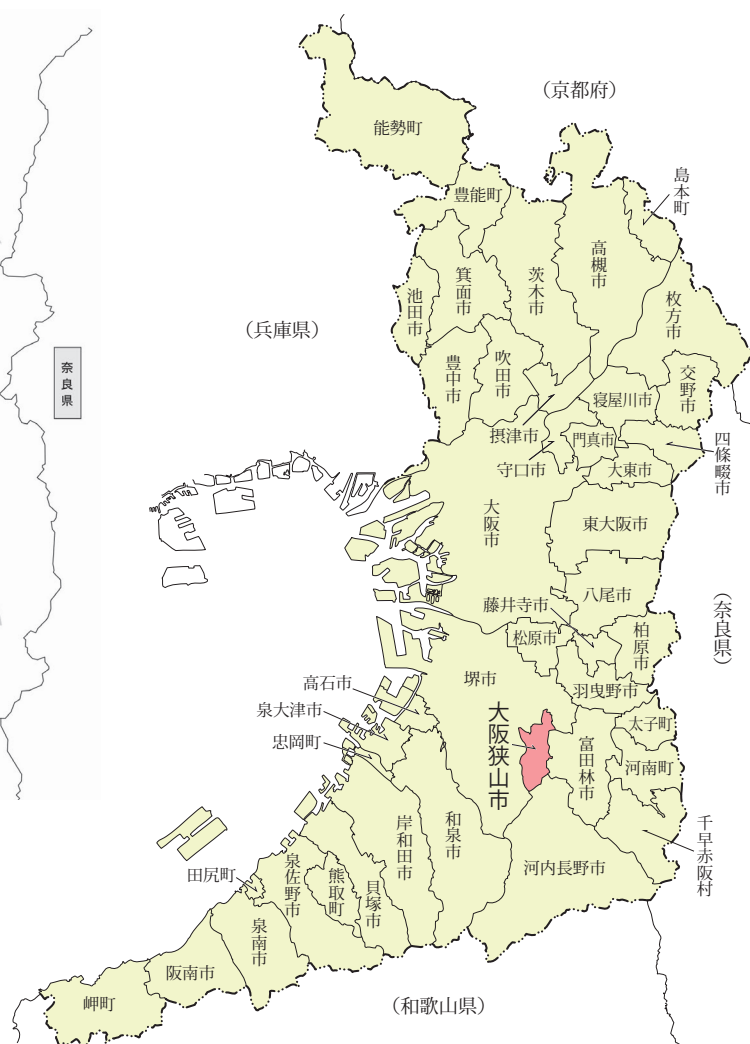
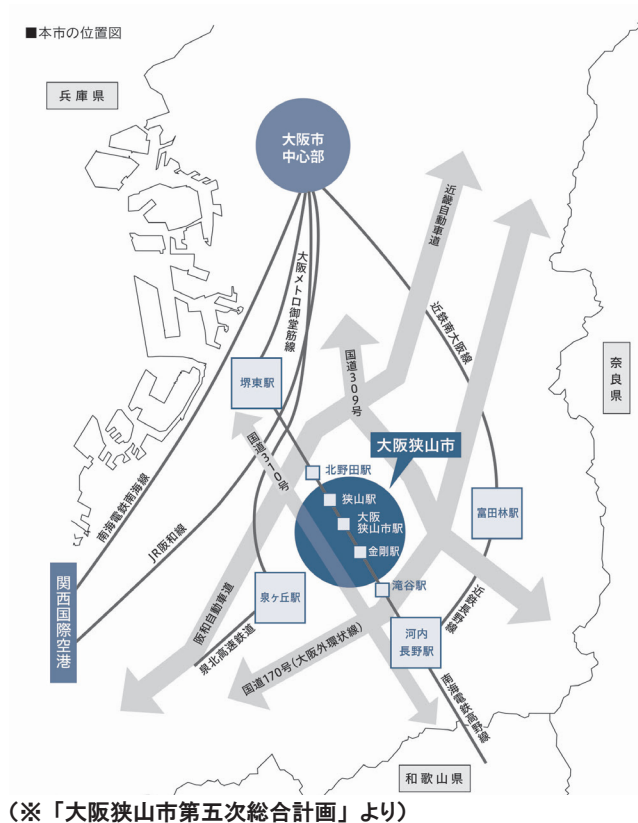


図1 大阪狭山市の地理的位置

① 地 形

「狭山」という地名は、「なだらかな丘陵に挟まれた見晴らしのよい広い谷間」という地形に由来します。東には羽曳野丘陵、西には泉北丘陵があり、その間に挟まれた土地です。

市域の中央には、シンボルである狭山池が豊かな水をたたえています。

市域は、狭山池から北にひろがる平野と南西部の狭山ニュータウンを中心とする泉北丘陵東端にあたる丘陵に分かれ、南が高くて北が低い、ゆるやかに傾斜する地形です。

狭山池の北堤からは、東の方向には、金剛山・葛城山などからなる金剛山地、南の方向には岩湧山・和泉葛城山などからなる和泉山脈を望むことができます。

市域を南から北へ流れる西除川（一級河川）は、市内に水源を持つ三津屋川と狭山池で合流し、北流します。

市域の東端を南から北へ流れる東除川は、狭山池の東北にある東常用洪水吐（通称東除）から始まり、隣接する富田林市甘山付近から流れる東除川支流と合流し、北流しています。

市域で最も標高の高い場所は、堺市・河内長野市と接する大野の南端付近で、海拔160～170メートルです。そこから堺市との市境の尾根沿いに、北へ向かってゆるやかに高度を下げ、海拔約150メートルの陶器山に至ります。周囲と比べて低い場所の標高は、茱萸木七丁目付近が海拔104メートル、市域の北端の東野西四丁目付近が55メートルで、市域外の北へ向ってさらに標高を下げています。

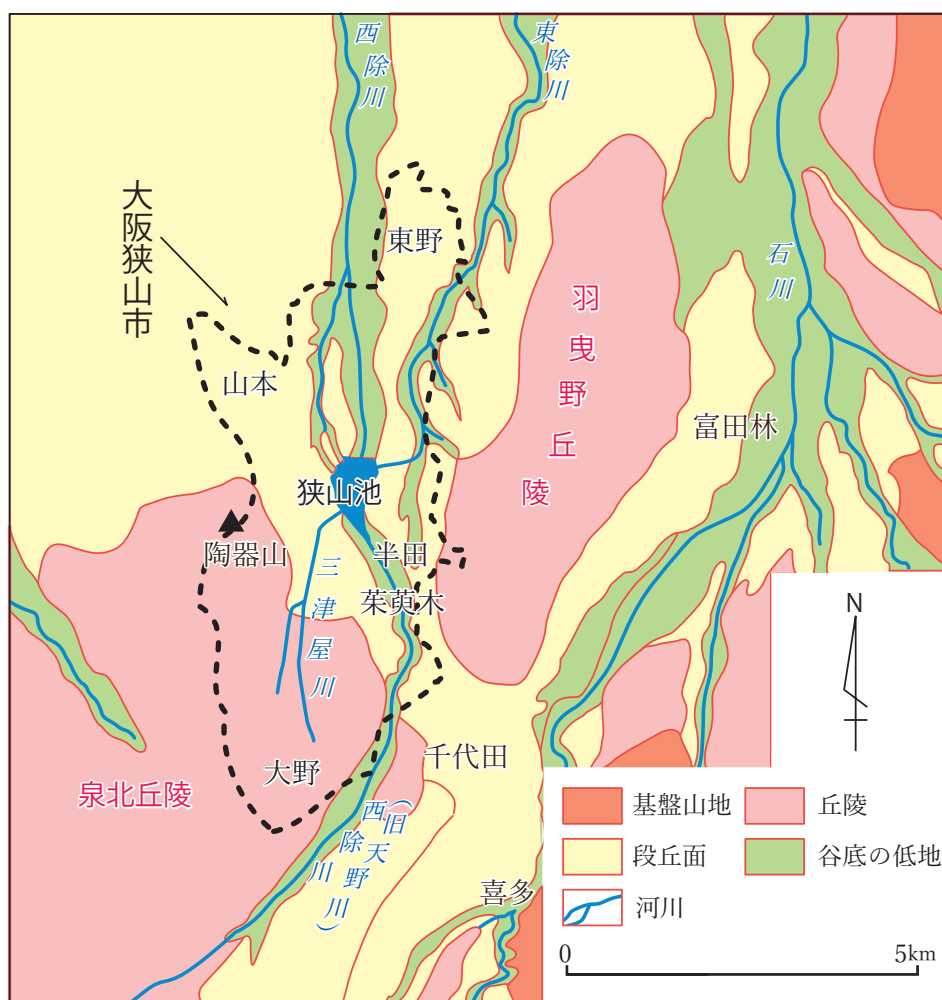


図2 大阪狭山市周辺の地形

この標高の違いは、本市の地形が、丘陵、高位・中位・低位の3面の段丘、谷底の低地、開析谷で構成されていることに起因します。

丘陵は、「狭山丘陵」ともよばれ、本市の南西部一帯に広がり、泉北丘陵の東端にあたります。今熊・西山台・大野台・大野が含まれ、市域の面積の4分の1を占めます。

丘陵より低い段丘面のうち、高位段丘面は、北西部の岩室・山本にあたります。中位段丘面は、市域にある平坦地の大部分を占め、西除川によって東西に分かれています。低位段丘面は、中位段丘面に接した、河川沿いに分布しています。

谷底の低地は、西除川・三津屋川・東除川の各河川沿いやその支谷に位置します。狭山池・太満池・大鳥池といった大きな溜め池は、いずれも谷底の低地をせきとめて築造しています。また小さい谷の多くは、段丘面の傾斜に沿って東西方向に伸び、それらの小さな谷をせきとめて多くの溜め池が築造されました。

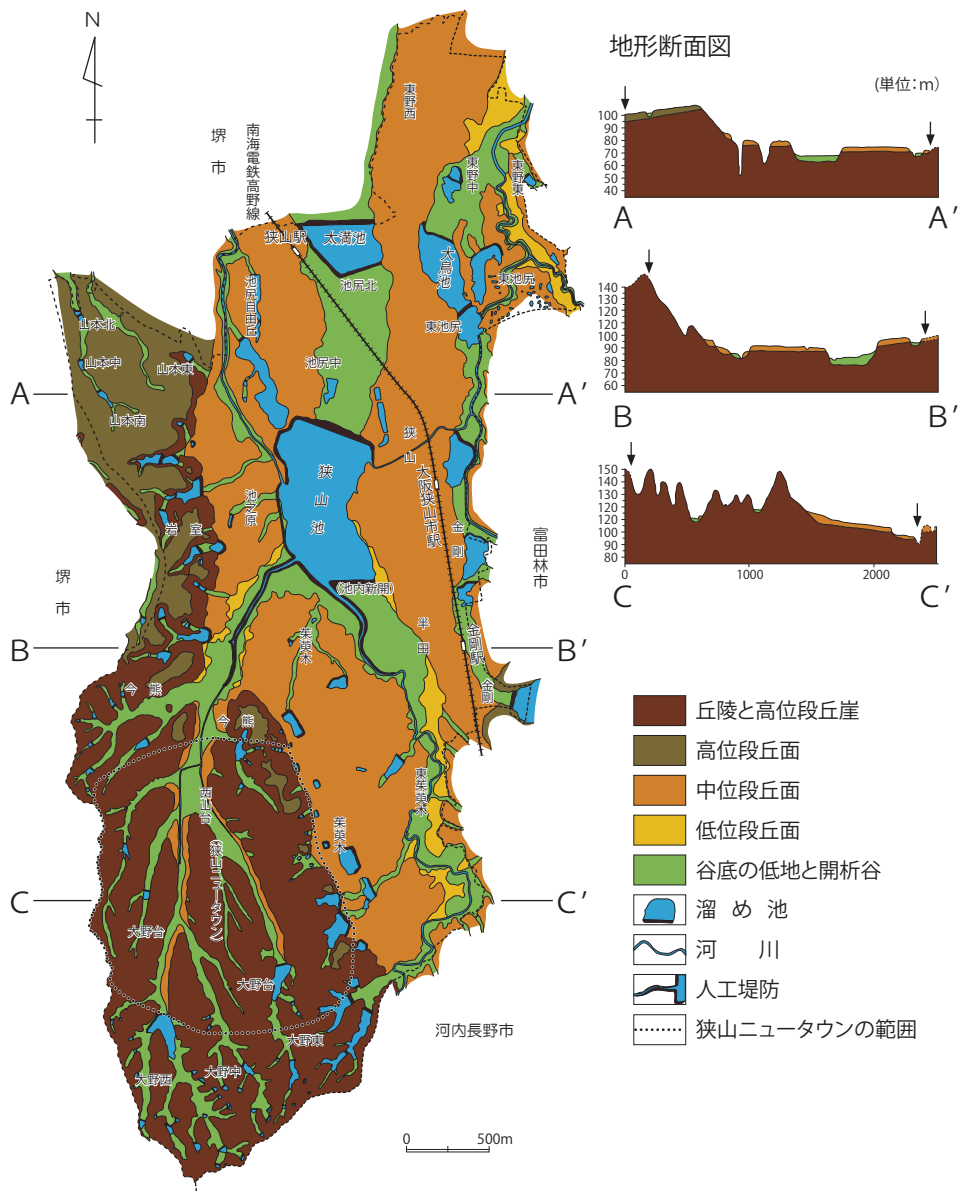


図3 大阪狭山市の地形分布と断面図

② 地 質

市内の地質は、大阪層群・段丘堆積層の二つからなります。

大阪層群は、日本の更新世（約258万年前から1万年前）の代表的な地層です。この時期には、氷期の海退と、間氷期の海進が繰り返されました。その結果、海底に積もった海成粘土層（アオバンと呼ぶ青色の粘土）と、淡水に積もった淡水粘土が重なり合っています。大阪平野の周辺部の丘陵地に広く分布しています。やわらかい砂礫と粘土の重なり合う地層が、厚さ180～200メートルに発達し、アズキ色・ピンク色・黄色などの火山灰層を数十枚はさみ込んでいます。

本市の大阪層群は、泉北丘陵の東端の丘陵地帯に分布しています。厚さが150メートル以上あり、連続性のよい地層です。砂礫層・砂層・粘土層からなり、数十枚の火山灰層をはさみ込んで、西北方向へゆるやかに傾斜しています。

段丘堆積層は、その場所が河川・湖や海だったときに、水中に積もってできた地層です。その地層が、地殻変動による隆起や気候・海水準の変動で陸地になった後、今度は河川の浸食で河床が低下した結果、河川沿いに取り残された河岸段丘にあります。本市では、高さによって、高位段丘堆積層・中位段丘堆積層・低位段丘堆積層の三つに大きく区分できます。

市域とその周辺の段丘堆積層は、大阪層群を不整合におおう中部更新統～上部更新統にあたり、泉北丘陵の北部や西除川の流域に平坦面をともなって広く分布しています。市域での高位段丘堆積層は、西北の山本と、西南の大野に分布し、平坦な高位段丘面を形成しています。礫層（砂岩・礫岩・花崗岩）と砂層からなります。また、市域での中位段丘堆積層は、厚さが2メートルあり、高位段丘堆積層と同じように礫層（砂岩・礫岩・花崗岩）からなります。

(2) 自然環境

① 雨量と気温

本市の気候は、温暖で雨の少ない瀬戸内気候です。

大阪府の気象概況によると、年間降水量は900～1650ミリメートル程度で、令和4年(2022)では、1か月の雨量が多い月で180.5ミリメートル、少ない月では16.5ミリメートルです。これは平成26年(2014)の300ミリメートル、50ミリメートルより差が大きくなっています。

1年間の平均気温は、直近30年間の平均は17.1度で、比較的温暖です。令和4年は、最高気温が38.4度、最低気温がマイナス0.5度を記録しています。

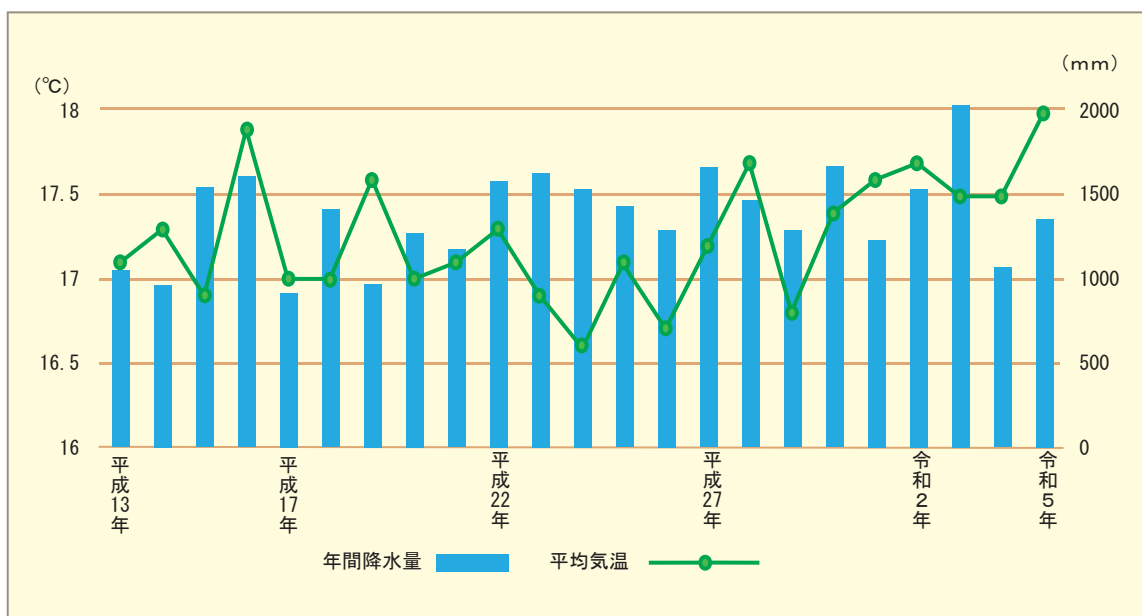


図4 大阪府の気象概況（国土交通省気象庁ホームページ、各種データ・資料、過去の気象データより作成）

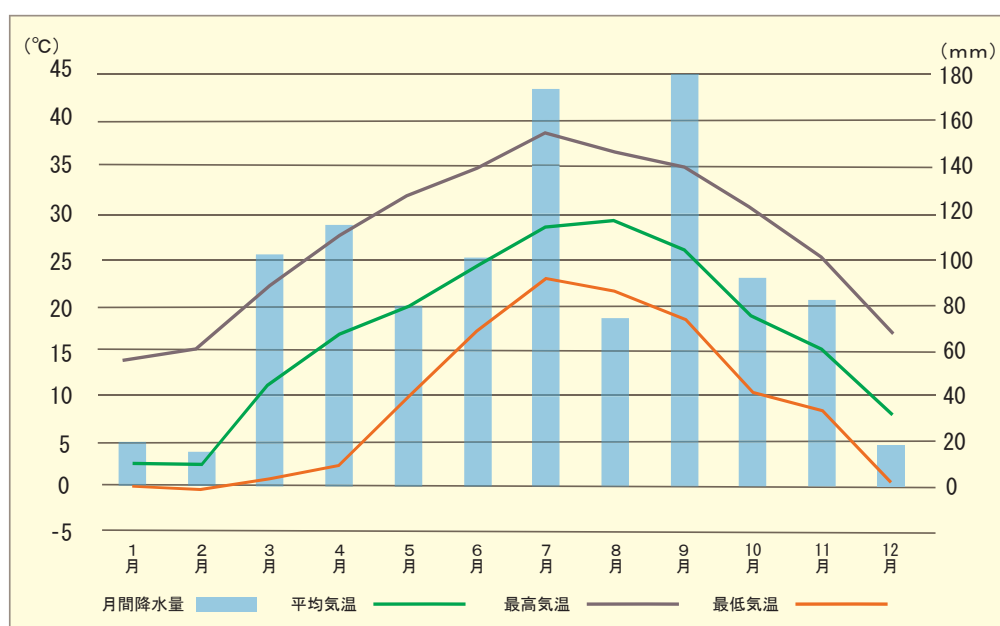


図5 大阪府の気温の変化（令和4年度（2022年度）「大阪府の気象」より作成）

② 植 物

市域にある植物のうち、樹木は泉北丘陵^{せんぼくきゅうりょう}の東端にあたる狭山ニュータウン南側の大野地区を中心とした場所にまとまって残っています。多くが二次林で、狭山神社や三都神社の鎮守の森には、コジイ・サカキなどの常緑広葉樹^{じょうりよくこうようじゅ}の群落^{ぐんらく}がわずかに見られます。



図6 狭山池北堤の桜

狭山池と副池^{ふくいけ}の周辺は、防災公園や都市公園として整備し、桜などを植樹しています。狭山池の周囲に植樹した桜は、早咲きの桜（コシノヒガン）が中心で、大阪府内でも、早くに満開を迎えます。

狭山池南側の西除川^{にしよけがわ}・三津屋川^{みつやがわ}の河川敷^{かせんじき}は、一部が緑道^{りょくどう}として整備が進んでいます。

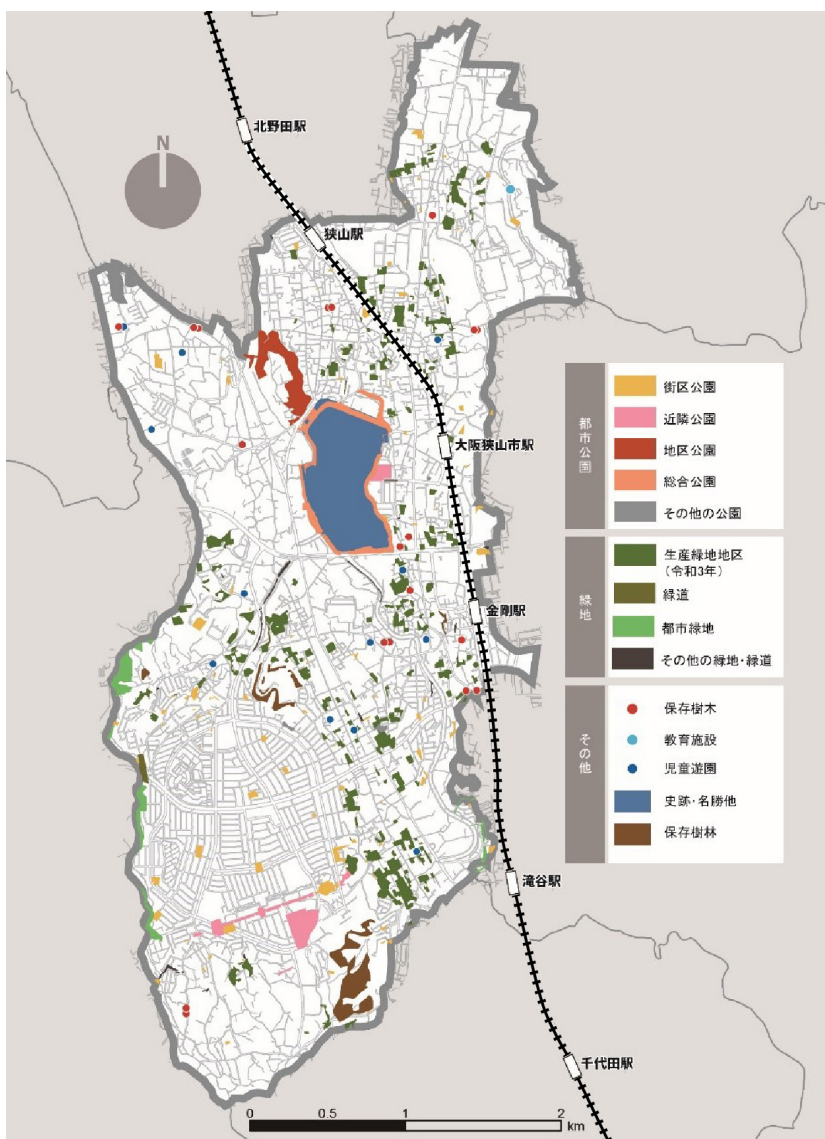


図7 大阪狭山市の緑地分布（令和4年（2022）3月「大阪狭山市都市計画マスタープラン」より）

③ 動物

市域の溜め池や川・水田には、水生生物が生息しています。狭山池よりも上流の西除川では、大阪府レッドリスト 2014 に載るヌマムツ、ドジョウ（絶滅危惧Ⅱ類）、タモロコ（準絶滅危惧）が確認できます。同じく狭山池上流の西除川旧流路沿いにはヒメボタル（準絶滅危惧）が生息しています。

陸上動物では、オツネントンボ、ジュウサンホシテントウ（準絶滅危惧）が確認されています。

その一方で、外来種のクビアカツヤカミキリによる桜の古木に対する被害が深刻化しており、対処と予防策をとっています。

鳥類は、カモなどの水辺の鳥を中心に多くの種類が確認できます。平成 2 年（1990）以降に堺野鳥の会が狭山池で実施した年間の観測では、73 種が確認されました（堺野鳥の会「鳥類目録」から）。この中には、大阪府や環境省のレッドリスト掲載種が 16 種含まれていました。平成 28 年度（2016 年度）に狭山池で実施した調査では、種類の変化を確認しています。

狭山池南堤の東端付近には、飛来する野鳥の保護と観察のため、平成のダム化工事の際に野鳥観察スペースがつけられました。

市域西部の陶器山あたりの丘陵では、コゲラなどの山野の鳥も確認されています。

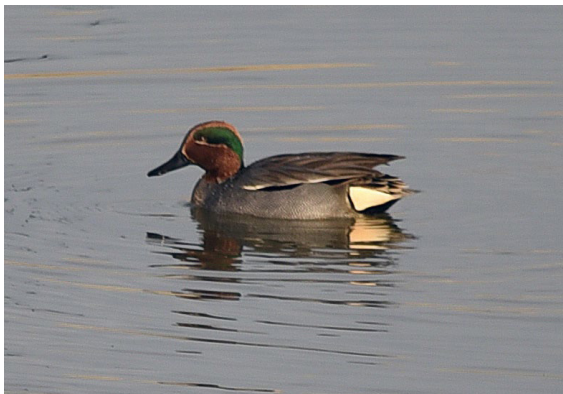


図8 コガモ



図9 クビアカツヤカミキリ対策を施した桜

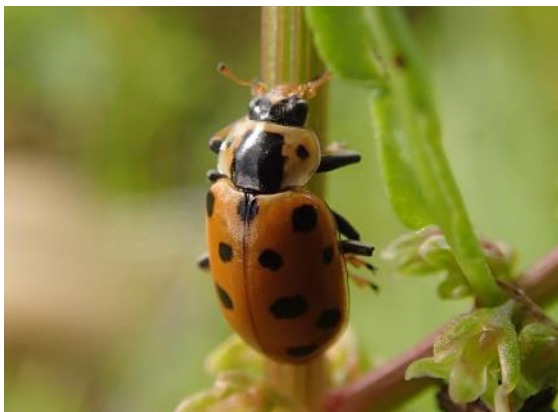


図 10 ジュウサンホシテントウ



図 11 オツネントンボ

2. 社会的状況

(1) 人口

① 人口

本市の人口は、昭和26年(1951)4月1日の町制施行時は9千人余りで、昭和35年(1960)ごろまでは横ばいで推移していました。それ以降は少しずつ人口が増加し、高度経済成長の始まりとともに人口が増加し始めました。昭和42年(1967)から南西部の丘陵地帯で狭山ニュータウンの大規模な開発が始まり、入居が開始された昭和44年(1969)6月以降は急激に人口が増加しました。特に、昭和45年(1970)から昭和50年(1975)までの5年間には、187.8パーセントと、大阪府内で一番の人口増加率を示しました。そして昭和60年(1985)の国勢調査で人口が5万人を突破し、それ以降もゆるやかながら人口増が続きました。

平成22年(2010)の国勢調査では58,227人であったものが、平成27年(2015)の国勢調査では57,792人、令和2年(2020)では58,435人となっています。その後も、人口は若干の増減を繰り返し、令和6年8月31日現在は57,756人です。社会的・地域的な課題(人口減少・社会包摂等)に向き合い、多様な主体と連携して解決に向かう取組みが、今後ますます重要になります。

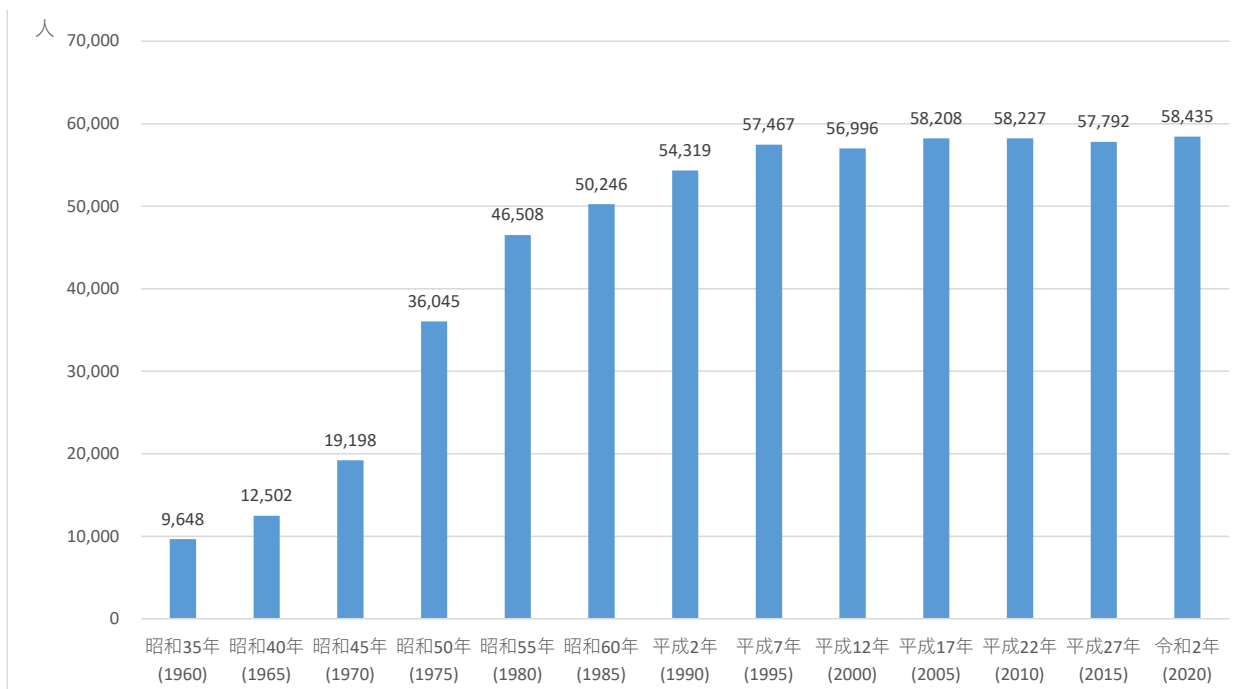


図12 大阪狭山市の人口推移(国勢調査より)

② 年齢階層別人口

年齢階層別の人口構成をみると、総人口に占める15歳未満の年少人口比率が、平成2年（1990）には18.8パーセントでしたが、平成27年（2015）には13.9パーセントと徐々に減少してきています。

逆に65歳以上の老年人口比率は、平成2年（1990）には8.0パーセントであったものが、平成17年（2005）には16.8パーセント、令和5年（2023）現在では28.3パーセントと、急速に上昇しており、確実に高齢化社会が到来しています。

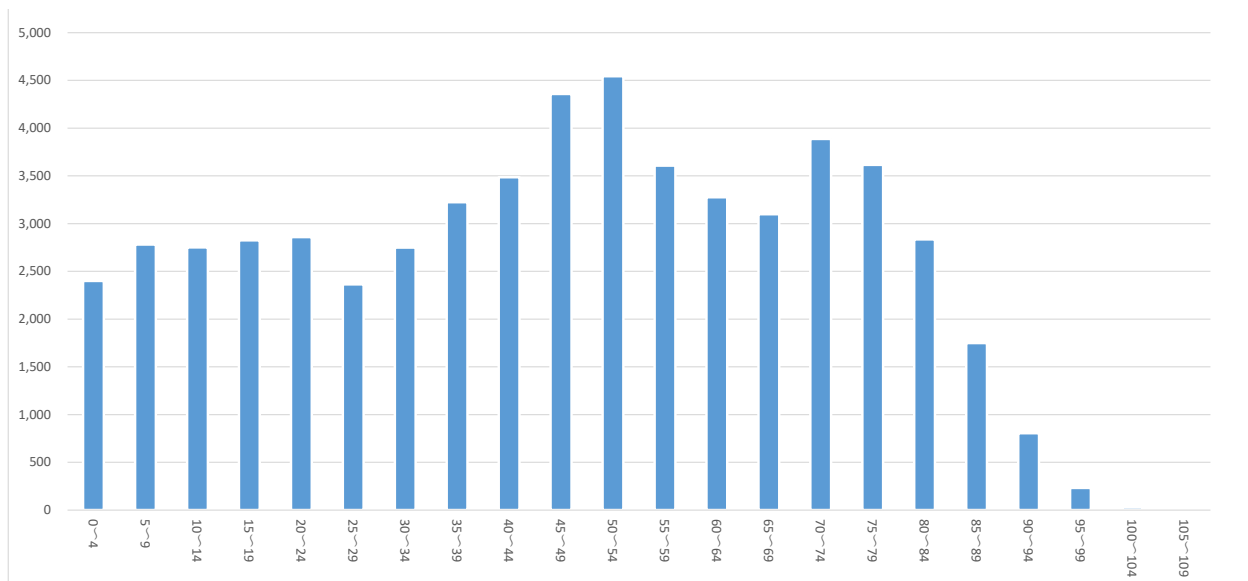


図 13 大阪狭山市民の年齢構成（令和5年（2023）7月現在）

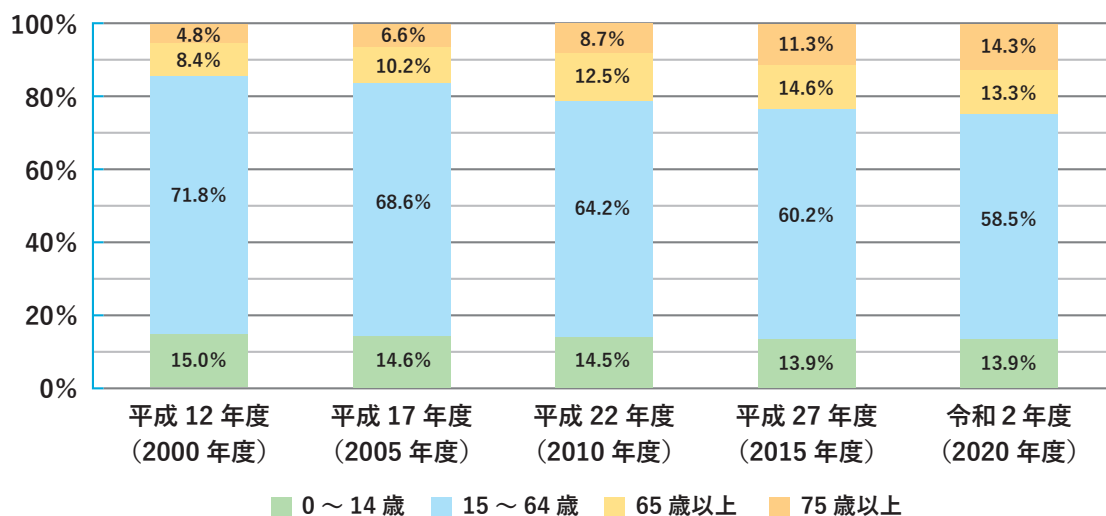


図 14 大阪狭山市民の年齢構成（「住民基本台帳」（9月30日）より）

③ 人口の推計

本市における人口の現状と将来の展望を提示した「大阪狭山市人口ビジョン」（平成 28 年 3 月策定）に示した将来人口は、中期的（令和 22 年（2040））数値として 53,600 人と推定しています（平成 27 年（2015）の 57,849 人より 4,249 人減少）。しかし、短期的に推定していた令和 2 年（2020）の人口が、推定を上回った結果、令和 3 年策定の「第 2 期大阪狭山市総合戦略」において将来の展望を修正し、令和 22 年の数値を 55,110 人としています。推移を示す曲線も修正し、令和 42 年（2060）に定住人口を 50,693 人と推定しています。



図 15 人口推定値の比較（国立社会保障・人口問題研究所準拠と将来展望値）

(2) 市域の変遷

江戸時代の終わりごろ、現在の本市域には、池尻村・東野村・茱萸木新田・岩室村・今熊村・西山新田・半田村・大野新田・山本新田の9カ村がありました。

行政単位としての村は、明治初頭から明治20年代初頭まで地方行政制度の改正を受けて変化を繰り返します。明治22年(1889)に町村制が施行され、当時第34戸長役場の所属であった池尻村・半田村・東野村の大字3カ村は狭山村に、第35戸長役場の今熊村・岩室村・山本新田・茱萸木新田・西山新田・大野新田の大字6カ村は三都村になりました。

そして、昭和6年(1931)に狭山村・三都村の両村は合併し、新たに狭山村となりました。その後、昭和26年(1951)に町制を施行して狭山町となり、昭和62年(1987)には市制を施行して大阪狭山市となりました。

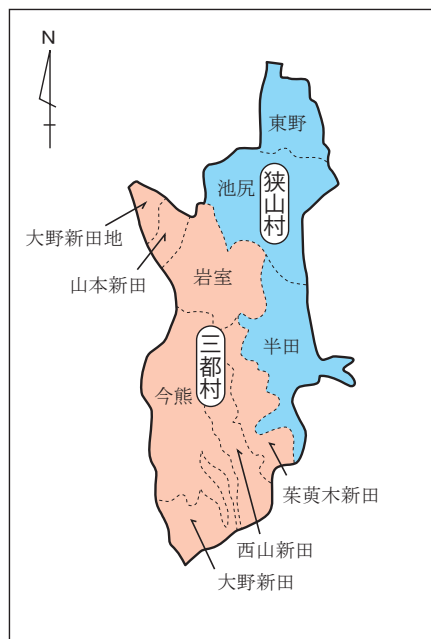


図 16 狭山村・三都村の範囲

表 17 明治前期の地方行政制度の変遷

年	地方行政制度
1872 (明治5)	堺県に区制施行 堺県河内国第22区(大阪狭山市域の9カ村すべて)
1874 (明治7)	堺県に大区小区制施行 堺県河内国第1大区3小区 8番組(東野村、他に北野田村・南野田村・丈六村・高松村・丈六新田・西野新田) 9番組(岩室村・今熊村・山本新田・茱萸木新田・西山新田・大野新田) 10番組(池尻村・半田村)
1880 (明治13)	堺県で郡区町村編制法に基づく連合町村制施行 堺県河内国古市郡役所管内 第5連合(市域の9カ村すべて)
1881 (明治14)	堺県廃止、大阪府へ編入 池尻・半田・岩室・今熊・山本新田・大野新田は各戸長村 茱萸木新田と西山新田、東野村と菅生村は、2カ村で連合戸長村
1884 (明治17)	大阪府丹南郡 第34戸長役場(池尻・半田・東野) 第35戸長役場(今熊・岩室・山本新田・茱萸木新田・西山新田・大野新田)
1889 (明治22)	町村制施行 大阪府丹南郡 狭山村(池尻・半田・東野) 三都村(今熊・岩室・山本新田・茱萸木新田・西山新田・大野新田)

※井上正雄『大阪府全志』一、四などより作成。

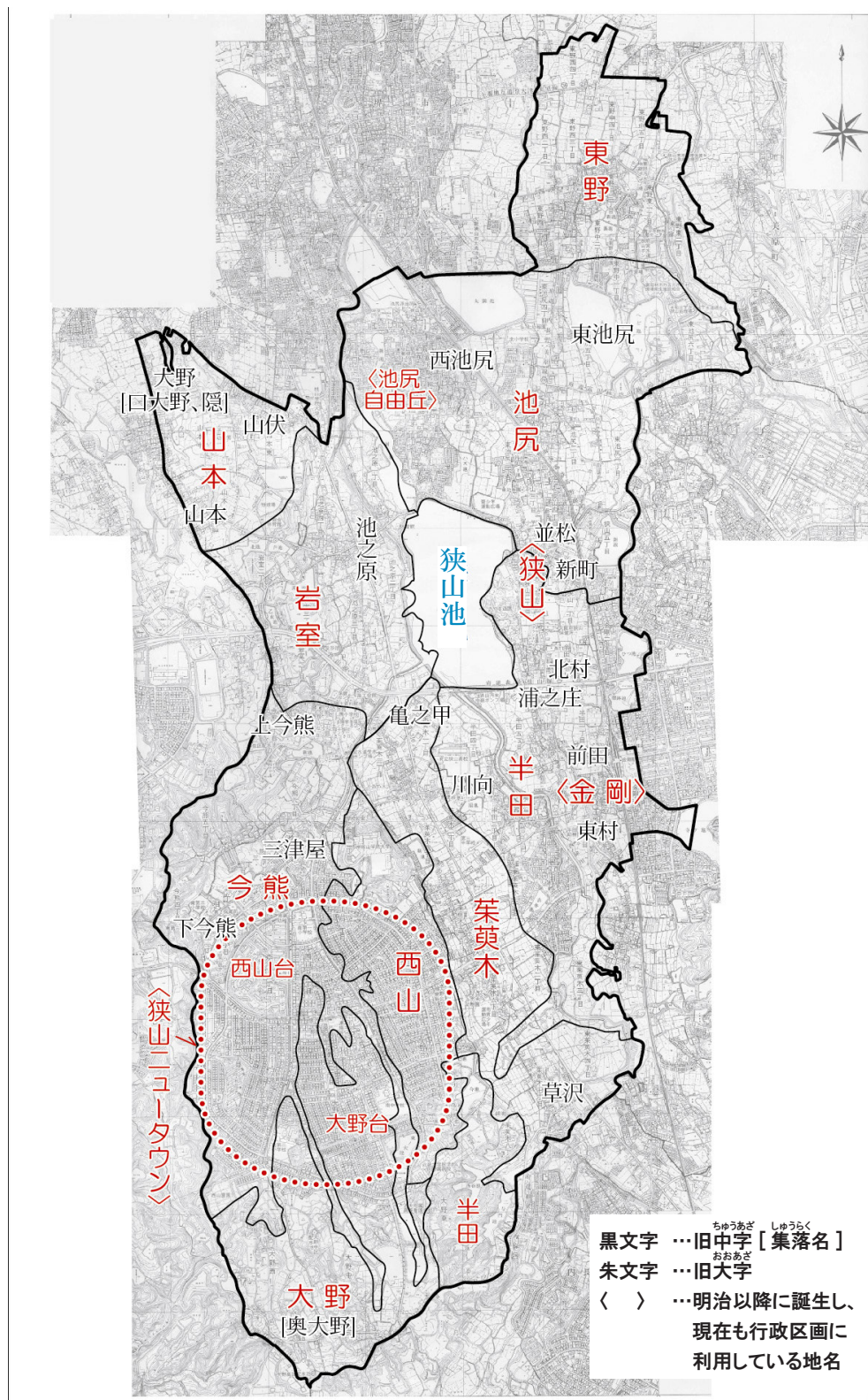


図 18 大阪狭山市内の地名(「大阪狭山市全図」(昭和 63 年)に加筆)

本図は、明治初期の村の範囲に、本市内で今も使われている地名を記しています。行政区画とは異なり江戸時代の村名などを残した地名が今でも交差点やバス停の名称として残ります。

(3) 土地利用

本市の全域は都市計画区域で、令和2年（2020）では、およそ65パーセントが市街化区域^{しがいか}、35パーセントが市街化調整区域となっています。

令和2年度の都市計画基礎調査によると、市街地がおよそ50パーセント、田畑・休耕地^{きゅうこうち}が19パーセント、山林と緑地が合わせて8パーセント、水面が7パーセントです。

市内には、狭山池^{さやまいけ}を中心として溜め池^{た い け}が多くあります。溜め池が多い土地であることは、泉州地^{せんしゅう}域を含めた大阪府南部の特徴です。なかでも本市は、市域面積に占める水面面積の比率が特に高い

ことが特徴となっています。市民に実施したアンケートでは、「水」といえば何を思い浮かべるかという問いに対し、77パーセントの人が「池の水」と回答しています。^{みずじゆんかん}（水循環計画策定時のアンケート調査より）

市街化区域は、ニュータウンなどの面整備済市街地^{めんせいびずみ}と旧集落^{きゅうしゅうらく}や小規模な開発が連続して形成された市街地からなります。また、旧集落の周辺^{くわかんち}では、農地などの空閑地で、開発がおこなわれ市街地が形成されつつあります。市街化調整区域の東野・大野・山本・池之原などでは集落地・農地・溜め池・樹林が一体となった田園的な環境が形成されていました。しかし、近年では、農業経営環境の変化などにもとない、休耕地^{こうさく}や耕作放棄地^{こうさくほうさち}が増加しています。

そこで地域の多様な主体と連携し、田植え体験で教育効果をめざすなど、地域の伝統農業を活かす取組みが、市内の小学校で始まりました。

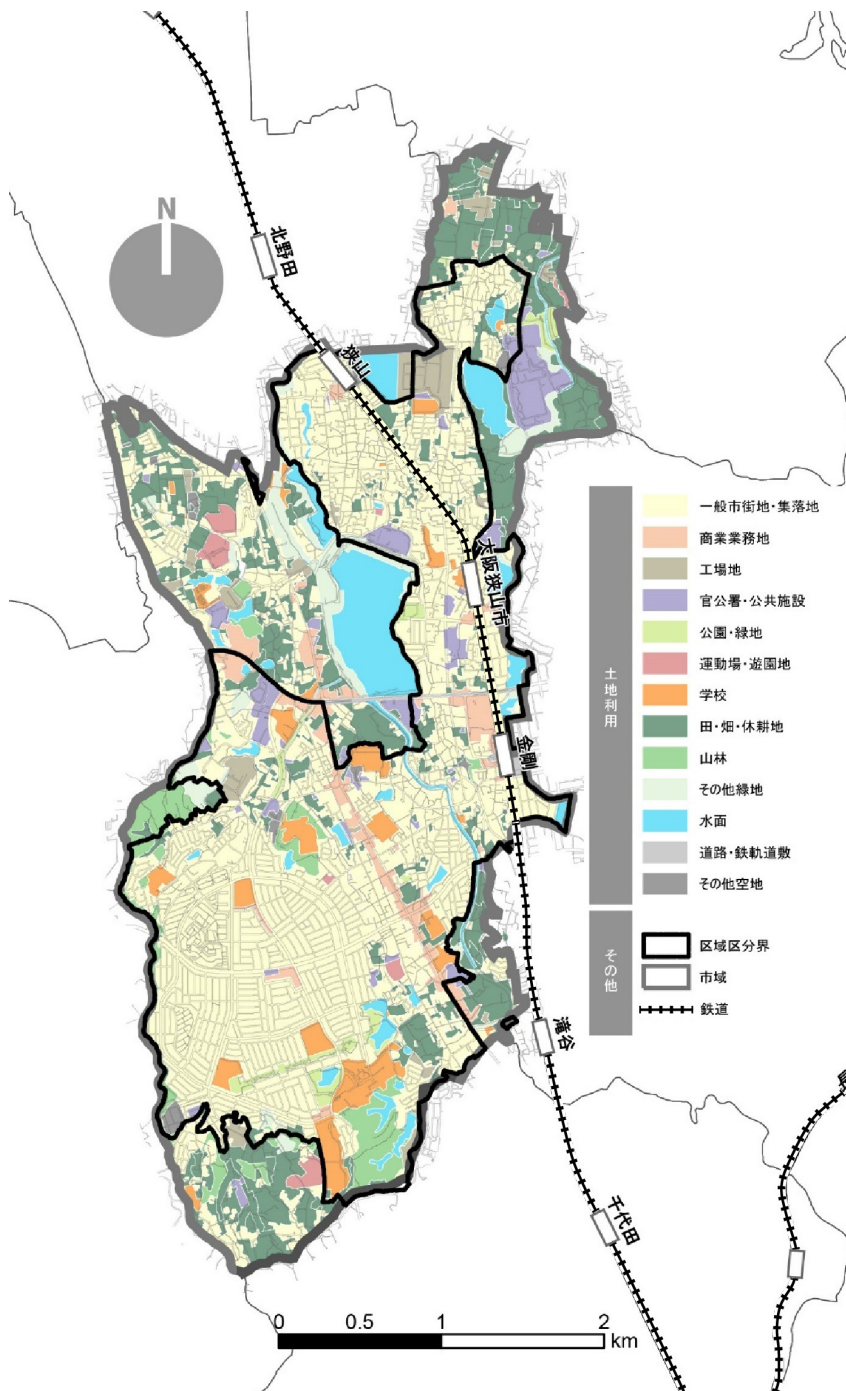


図 19 大阪狭山市土地利用分類図

(4) 産業

① 農業

本市の江戸時代の生業は、農業が中心でした。表作として米・綿が、裏作として麦・菜種などが作られていました。現在では農家数が減っていますが、溜め池かんがいを利用した農業が主流であることは変わりありません。

綿や菜種は、江戸時代に販売用農産物として、農家に多くの収入をもたらしました。明治時代中期以降、これらの作物の代わりに、野菜や果樹の園芸農業がおこり、大都市向けの近郊農業として発展しました。昭和30年代（1955～1964）も、大都市大阪に近い近郊農業的色彩の強い農業形態でした。しかし、都市化の進展により専業農家は減り、宅地開発で農地や溜め池の数も減りました。農家数の減少は、現在も続き、近世・近代を通じて農業が主要産業だった本市域において、第三次産業が増加し、産業構造に大きな変化をもたらしています。

現在では、野菜栽培のほか、ブドウの栽培が盛んにおこなわれています。特に「大野ぶどう」は、甘いブドウとして人気が高く、夏季には栽培農家が直売所で販売しています。



図20 大野地区のぶどう栽培の様子

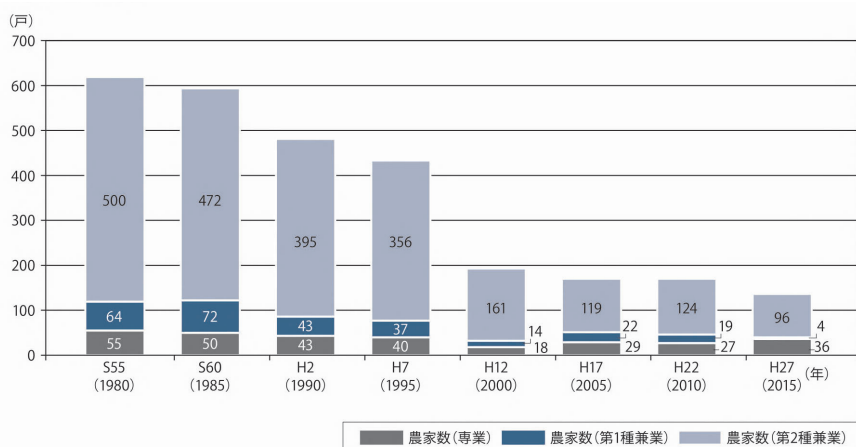
② その他の産業

都市化が進む以前の本市では、農業が盛んでした。しかし昭和30年代以降は、第二次・第三次産業の製造業、卸・小売業、サービス業に従事する人が増加しています。市内事業所の主な業種は、卸売業・小売業、サービス業、不動産業、飲食店などで、第三次産業が中心となっています。

従業員数は20,425人（令和3年度版本市統計書）で、その30パーセント近くが医療・福祉従業者、ついで卸売業・小売業、製造業、飲食店、教育・学習支援業となります。本市では、近畿大学

病院をはじめ多くの医療機関があるため、医療・福祉従業者が多くなっています。

地蔵盆や秋祭りなどの伝統行事を土曜・日曜・祝日に移して担い手を確保し、子育て世帯の転入者が参加しやすい行事を増やすなど、様々な取り組みが始まっています。



(注) 平成12年(2000年)以降については、経営耕地面積30a以上で、農産物販売が50万円以上の販売農家に限る。

図21 農家数の状況（「第五次大阪狭山市総合計画」より）

③ 観光

近世から農村地帯であった本市では、観光^{かんこう}に関わる産業が発達しませんでした。しかし、戦前から現在にいたるまで、南海電気鉄道株式会社など民間事業者が先行する形で、ハイキングコースパンフレットの発行や、沿線案内で紹介されています。昭和初期^{こうやせん}の高野線沿線の観光案内には、狭山池^{さやまいけ}が名勝^{めいしょう}として紹介されています。また、昭和13年(1938)に「狭山池遊園^{さやまいけゆうえん}」が開園し、唯一の観光地となりました。戦後、昭和27年(1952)には「狭山競艇場^{きやうていじやう}(大阪競走場)」が開場し、モーターボートレースが開催されました。しかし、湯水^{かつすい}などの影響で昭和31年(1956)にわずか4年でその幕を閉じました。

競艇場の廃止から3年後の昭和34年(1959)、もとの「狭山池遊園」の場所が、「さやま遊園」として復活しました。「さやま遊園」は、3,000坪^{つぼ}のバラ園、200坪のバードガーデンなどを整備し、子ども向けの遊園地として、多くの親子連れが訪れました。

昭和48年(1973)には大観覧車^{だいかんらんしゃ}も登場し、その後も屋内スケートリンクやリバープールなどが造られ、施設の充実が図られましたが、入場者は徐々に減少し、再開から40年後の平成12年(2000)に閉園しました。

現在は、平成の改修工事(防災ダム化工事)によって周辺が公園整備された狭山池と、池畔^{おおさかふりつさやまいけはくぶつかん}に建つ「大阪府立狭山池博物館」(以下「狭山池博物館」と記す)が、観光スポットとなっています。

国史跡狭山池はダム化工事後、周遊^{しゅうゆう}できる遊歩道を設け、都市公園として市民だけでなく大阪府民の憩いの場となっています。

「狭山池博物館」(安藤忠雄^{あんどうただお}設計)は、狭山池から出土した文化財を展示・保存・公開するダムサイトミュージアムとして、国内外からの観光客が、年間10万人近く訪れます。



図22 大阪府立狭山池博物館



図23 狭山池公園で憩う人びと(平成23年(2011)頃)



図24 さやま遊園再開時の駅前通り(昭和34年(1959)頃)

(5) 交通

市域の幹線道路は、古くから堺と河内長野を結ぶ西高野街道と並行して設けられた国道310号のほか、府道26号大阪狭山線（下高野街道）・府道198号河内長野美原線（中高野街道と並行）・府道202号森屋狭山線（狭山池通り）・府道34号堺狭山線・市道狭山河内長野線・市道廿山高蔵寺線・市道金剛泉北線などの道路が幹線道路網を形成しています。

公共交通機関は、明治31年（1898）に高野鉄道が、大小路駅（現在の堺東駅）―狭山駅間で開通し、その後、順次延伸して大阪・堺の市街地や河内長野・橋本・高野山を結びました。高野鉄道は、社名変更と合併を繰り返し、昭和22年（1947）に南海電気鉄道高野線となりました。鉄道の開通は、沿線開発として、さやま遊園の開園や池尻自由丘、狭山ニュータウンの開発につながり、本市の都市化を後押しする大きな役割を果たしました。

また、平成13年（2001）からは公共施設を結ぶ市循環バスが運行を開始し、現在は市外の商業施設まで運行範囲を拡大するなど、高齢者をはじめ市民の移動の手段として利用されています。

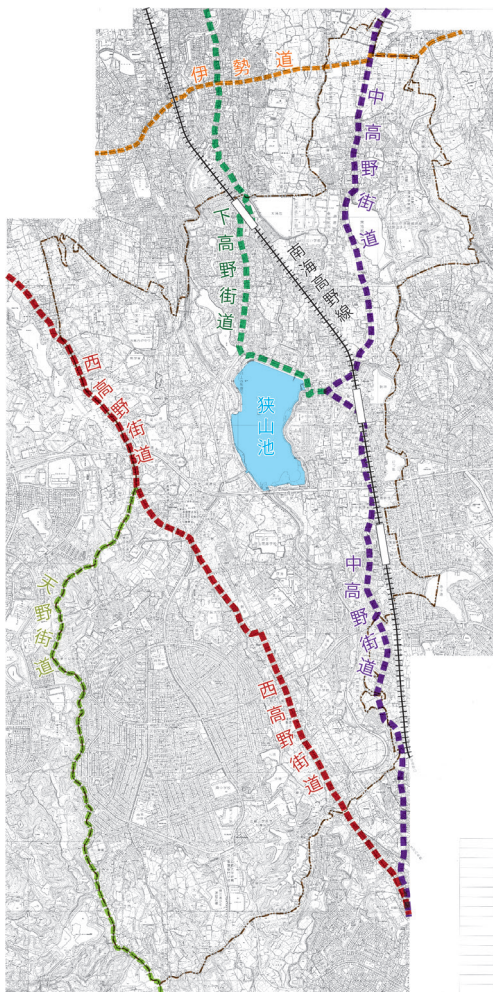


図25 大阪狭山市内を通る歴史街道

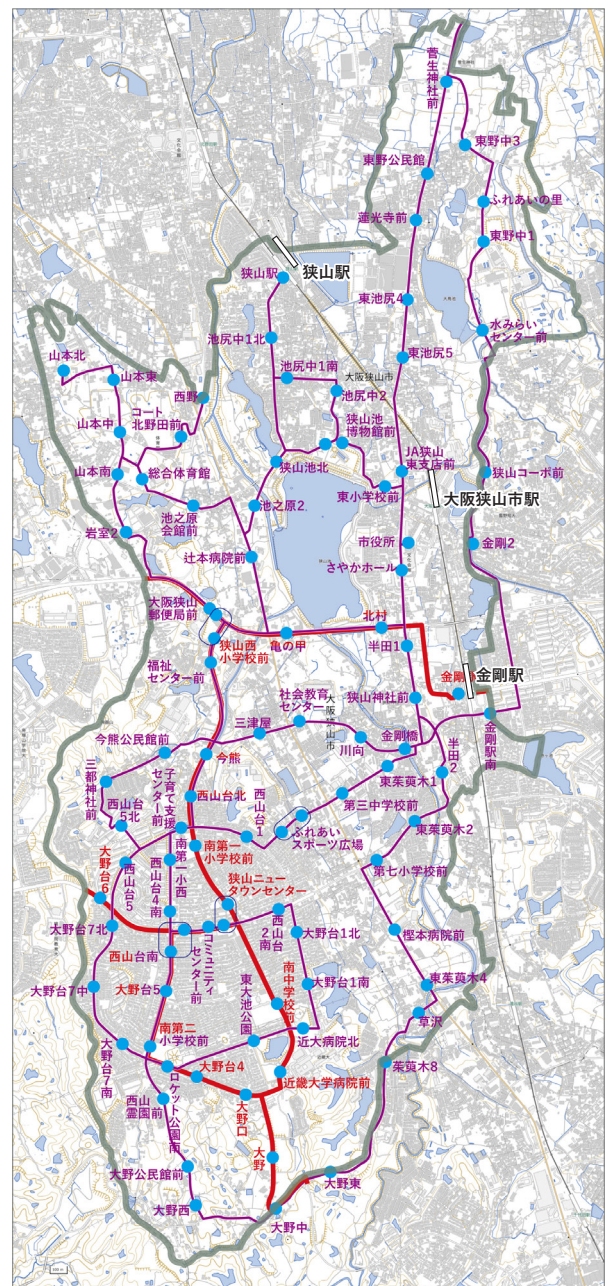


図26 大阪狭山市内のバス路線図
(赤：南海バス 紫：市循環バス)

(6) 地区と中学校区

本市は、コンパクトな市域の中に、市街地・農地・樹林などが残ります。以前は、江戸時代から続く地区と宅地開発で誕生した狭山ニュータウンや、鉄道駅周辺・幹線道路沿いとそれ以外の場所など、伝統的な集落と新興住宅地が隣接するそれぞれの地区の中でも生活圏が大きく分かれていました。しかし近年は、市街地の拡大や交通事情の変化により、違いが少なくなっています。

ここでは、市内の地域の説明として、上位計画である第五次本市総合計画で、まちづくりの単位として方向性が示されている、中学校区ごとに紹介します。

① 狭山中学校区

東野西・東野中・東野東・東池尻・池尻中・池尻北・池尻自由丘・狭山・半田・金剛・池之原

この校区の特徴として、狭山池・大鳥池・太満池・副池などの大きな溜め池があり、校区を縦断するように南海電気鉄道高野線が通っています。「狭山駅」「大阪狭山市駅」の2駅があり、市役所も含まれます。

史跡狭山池や大阪府立狭山池博物館・大阪狭山市立郷土資料館(以下、「狭山池博物館・郷土資料館」と記す)があり、校区外からの来訪者が多いことも特徴です。

② 第三中学校区

山本東・山本中・山本南・山本北・池之原・岩室・金剛・茱萸木・東茱萸木・今熊・西山台

堺市と河内長野市を結ぶ国道310号が通り、国道と並行する南北に長い校区です。国道沿いには商業施設が建ち並び、泉北ニュータウン方面へ向かう主要道路(府道森屋狭山線)が校区の中央を東西に横断するなど、市域の中でも交通量が多い校区です。

総合体育館・図書館・公民館・福祉センターなどの公共施設があり、金剛駅が位置しています。

③ 南中学校区

西山台・大野台・大野東・大野中・大野西・今熊・茱萸木

生活道路や公園などの都市基盤が整備された狭山ニュータウンを含み、コミュニティセンターと消防署ニュータウン出張所があり、食料品店などの商業施設が集まっています。

校区南側の河内長野市や堺市と接する付近は、市域で最も標高が高く、ブドウ農家の農園と樹林が広がっています。校区西側で堺市との市境になる天野街道は、遊歩道として整備され、周辺に緑地帯があり、みどり豊かな空間として市民に愛されています。

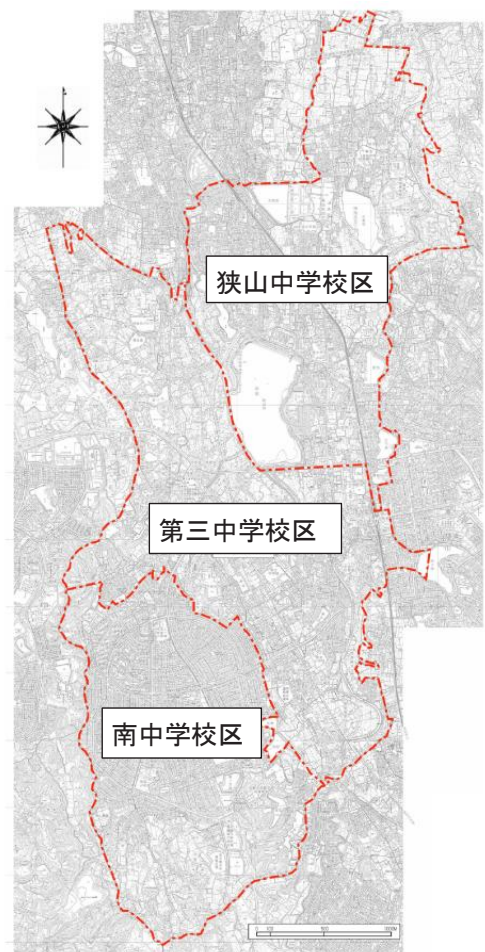


図 27 中学校区

3. 歴史的背景

(1) 原始

① 旧石器・縄文・弥生時代

○市内採集石器からみた狭山

本市では、旧石器時代から縄文時代・弥生時代にかけての石器が採集されており、約2万年前（後期旧石器時代）から人々の活動の場となっていました。市内で採集された石器の多くは、本市の東12キロメートルにある二上山（大阪府太子町と奈良県香芝市の境）で採れる火成岩である輝石安山岩「サヌカイト」で作られています。サヌカイトは、黒色でガラス質の成分を多く含む石材で、石の一端に打撃を与えると、薄くはがれる性質をもちます。その薄くはがれた破片をさらに加工し、必要な道具を作りました。

旧石器時代の石器では、包丁やナイフのように肉や皮を切るときに使う「ナイフ形石器」などが見つかっています。

縄文時代・弥生時代の石器では、より動きのすばやい小型の動物を狩るときに使う弓矢の矢の先につける「石鏃」や、動物の皮や魚のうろこをはぐときに使う「石匙」などを確認できます。

そのため、当時の人々が市域で狩りをしていたことは確実です。縄文時代の土器が市域で見つかっているので、当時の人々が暮らした集落などの発見が待たれます。



図28 市内で採集された石器

② 古墳時代

○集落遺跡の出現

古墳時代の市域では、集落の出現が確認できます。池尻地区の池尻遺跡では、古墳時代の前期から中期にさかのぼる遺物や遺構が見つかっています。同遺跡では、7世紀以前とみられる水田遺構も検出されました。南北に長い長方形で、広さが畳1～2枚ほどの小区画の水田遺構が140筆も見つかり、狭山池築造に先行して稲作をおこなっていたことがわかります。遅くともこの水田を使っていた時期には、市域に人々が定住し、生活を営んでいました。

○須恵器生産の盛衰

須恵器は、4世紀末に、朝鮮半島から来た技術者が作りはじめた灰色の焼き物です。山の斜面に沿って作った幅2メートル、高さ1.5メートル、奥行10メートルほどの半地下のトンネルのような窯の中で、たき口をふさいで酸素を少なくして、1,000度以



図29 池尻遺跡の遺構出土状況



図 30 大阪狭山市内で出土した
須恵器

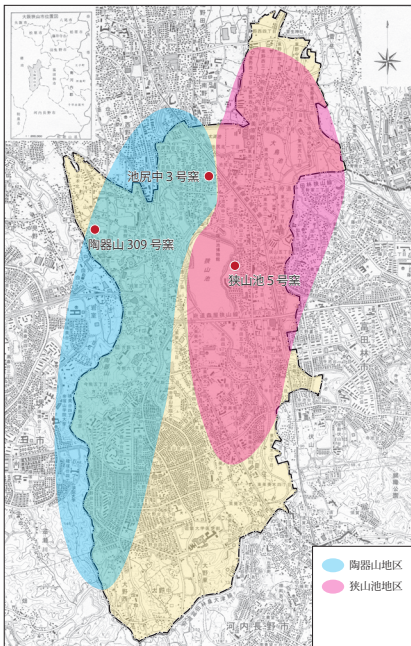


図 31 大阪狭山市内の須恵器窯跡
の分布

上の高温で焼きます。たき火の 600 ～ 800 度の低温で焼いたそれまでの土器と比べ、とても硬くて丈夫です。須恵器は、煮炊きで火にかけると割れやすいのですが、水を通しにくいので、水や酒などの液体をためておく容器に適していました。

須恵器の一大生産地となったのが、現在の堺市・和泉市・岸和田市と本市にまたがる泉北丘陵とその周辺で、窯跡が 1000 基近くも見つかっています。この須恵器の生産地は、『日本書紀』に「茅渟 県 陶 邑」と出てくるので「陶邑」とよばれています。この一帯は、須恵器を生産するのに必要な淡水粘土や水、焼くときの燃料になる薪を手に入れやすく、丘陵の斜面も窯を作る地形に適していました。

須恵器は、古墳の副葬品にも使うため、供給先の古墳へ運ばれます。本市の北方には、百舌鳥・古市古墳群が位置し、市域で作った須恵器の供給先になっていました。古墳群に近い本市とその周辺は、陶邑で焼いた完成品を供給先へ運ぶのに便利な場所でした。

陶邑窯跡群の東端に位置する本市では、須恵器の窯跡がこれまで 100 基見つかっています。それらの調査結果から、市域で須恵器の生産が始まる時期は 5 世紀末であり、最盛期は 6 ～ 7 世紀であると考えられています。

なお、現在「須恵器」と漢字表記を統一していますが、かつては別の名称で「祝部土器」「陶質土器」「朝鮮式土器」ともよばれ、「陶器」と表記して「すえき」とも読んでいました。市民が散策する天野街道の通る「陶器山」をはじめ、本市と接する堺市中区の河川「陶器川」や「陶器北」地区、本市山本の地車が祭礼の際に宮入りする「陶荒田神社」（堺市中区上之）など、須恵器の生産地に由来する「陶器」「陶」は、現在も市民にとって身近な存在です。

(2) 古代

① 飛鳥時代

○狭山池築造

市域のほぼ中央部に位置する狭山池は、現存する日本最古のダム式溜め池です。奈良時代にできた歴史書『日本書紀』『古事記』に、池の築造を伝える記事があります。

『日本書紀』は、崇神天皇が河内狭山の埴田の水が少ないので、多くの池や溝を掘って、農業を盛んにするように命じた、という伝承を載せています。また『古事記』は、垂仁天皇の子である印色入日子命が狭山池を造った、という伝承を載せています。

狭山池の「平成の改修」にともなう埋蔵文化財の発掘調査では、初期の堤体に対応する木製の樋管（水を池外に流す管）が北堤の東端近くで見つかりました（下層東樋）。この樋管は、コウヤマキ材で年輪年代測定法によって616年（推古天皇24年）に伐採したことがわかりました。この発見により、狭山池は7世紀前半の築造であることが判明しました。

現在の狭山池の北堤は、築造当初の堤体の上に、盛土による嵩上げを繰り返していることも判明しました。築造時の堤体は、河岸段丘の谷底の幅が狭くなった場所に位置し、水分や湿気の多い軟弱な地盤上に、西除川（旧天野川）と三津屋川から流れ込む水をせきとめて上流側に貯水するための構造物でした。土を高く積み上げた「堤体（ダム本体）」には、十分な強度が必要になります。堤体の強度が足りないと、水圧に負けて堤体が下流側へずれたり、膨大な量の盛土が自重に耐えられずに崩れたりします。そういう堤体の崩壊を防ぐためには、巨大な堤体にふさわしい高度な土木技術と特別な工法の採用が欠かせません。

朝鮮半島から渡来人が伝えた特別な工法が、葉のついた枝を敷きつめた層を土の層と交互に敷きこんで積み上げる「敷葉工法（敷粗朶工法）」です。この補強土工法は、大河が流れる中国大陆で生まれ、朝鮮半島を経て伝わった最新の土木技術でした。狭山池の築造は、当時の東アジアの技術交流を物語っています。

② 奈良時代

○行基の狭山池改修

東大寺の大仏（毘盧舎那仏）の造立に協力し、大僧正に任命された僧行基は、天平3年（731）に狭山池院・尼院を造りました。行基の業績をまとめた「天平十三年記」には、行基が築造に関わっ



図 32 木製樋管（下層東樋）

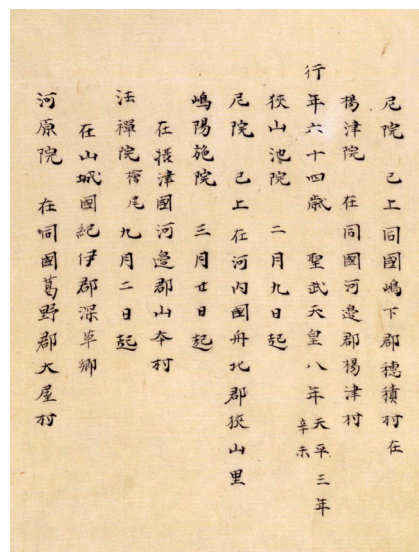


図 33 『行基年譜』に記された「狭山池院」と「尼院」

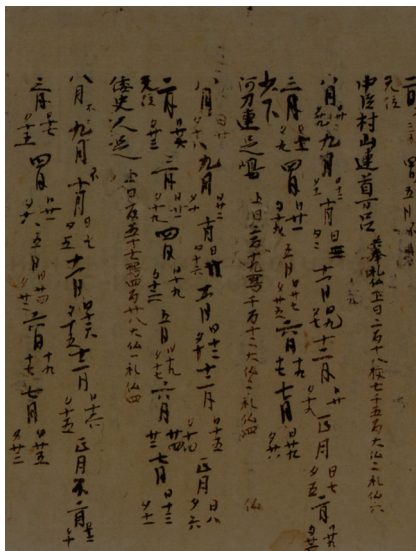


図 34 『正倉院文書』にみえる「中臣村山連首麻呂」の記事 (749 年)

た池の一つとして狭山池が出てきます。行基とその集団は、狭山池の近くに狭山池院・尼院を建立し、狭山池の改修に関わったと考えられます。

○中臣村山連首麻呂

この時代、中臣村山連首麻呂という名前のわかる最初の狭山出身者が現れます。彼は、神社の祭祀をつかさどる中臣系氏族の村山連の一員です。村山連という氏族は、河内国丹比郡狭山郷に本拠をもち、伊勢神宮の最高責任者である伊勢大宮司を2代も出し、中臣高良比連とともに丹比郡で伊勢信仰を中心的に支えました。その神道信仰を担う氏族に生まれた首麻呂は、天平18年(746)から約10年間、写経に誤りがないかチェックする校生として、平城京の写経所に勤務しました。その仏教經典の校正作業を通じて仏教にふれた首麻呂は、天平20年(748)に出家を希望します。

③ 平安時代

○陶山の薪争い

貞観元年(859)、「陶山の薪争い」とよばれる河内国・和泉国間の訴訟事件が起こります。国境の尾根筋にある「陶山」の所属をめぐる対立です。当時の陶邑では、須恵器を焼く薪の不足が深刻化していたことがわかり、須恵器の生産の衰えを示すものです。

○二つの式内社

市内には、延長5年(927)にできた『延喜式』神名帳に大社と記される神社(式内社)2社が現存しています。狭山神社は、広大な狭山池そのものを神格化した神を、中臣系氏族の村山連が祀っていたと考えられています。狭山堤神社は、狭山池の堤の樋を管理した中臣系氏族の高良比連が、狭山池の堤を神格化した神を祀っていたと考えられています。当初の正確な所在地は不明ですが、狭山池の北堤かその近くに推定されています。

○狭山荘の立荘

平安時代の後期になると、京都・奈良などの公家や寺社が所有する荘園が全国に開かれます。当時、丹南郡狭山郷とよばれていた当地でも、鎌倉時代初期の建久2年(1191)までに興福寺領狭山荘が成立しました。荘園には、役所や市場、寺社など荘園の管理に必要な施設が設けられました。狭山荘に関連する遺跡として、市内では池尻遺跡や庄司庵遺跡が確認されています。



図 35 狭山神社



図 36 狭山堤神社(狭山神社内)

(3) 中世

① 鎌倉時代

○重源の狭山池改修

平氏による兵火で焼失した東大寺（奈良市）を鎌倉時代の初めに復興した重源が、建仁2年（1202）に狭山池を改修しました。行基を深く敬慕していた重源は、仏教的な善行を積んで極楽浄土に生まれたいと願う多くの人々の協力を得て、行基ゆかりの寺院・溜め池・道路・橋・港の再整備を進める中で、「行基菩薩の旧跡」で山野のように荒廃していた狭山池の修復に取り組みました。それを裏づける石碑「重源狭山池改修碑」が、平成の改修にともなう発掘調査で見つかりました。そこには「狭山池の水を引く摂津・河内・和泉3か国50余郷の地域住民の依頼に応じて改修した」と刻まれています。

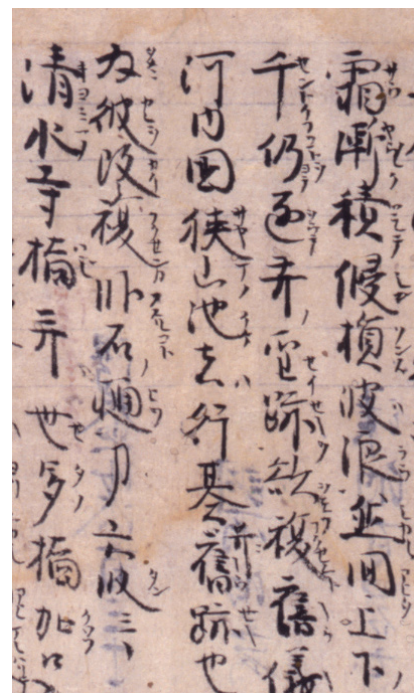


図 37 『南無阿弥陀仏作善集』

② 南北朝・室町時代

○中世城郭池尻城と半田城

南北朝時代の市域は、南朝・北朝の両勢力が合戦で拠点をうばい合う最前線にありました。南河内を本拠地とした南朝方武将の楠木正成が、正慶2年（1333）に河内国で幕府軍と戦い、池尻の地頭を追い落としていきます。また、南朝方武将の高木遠盛が、延元3年（1338）に北朝方細川勢への攻撃に参加し、池尻・半田で戦いました。正平2年（1347）、楠木正行（正成の息子）の軍勢に参加した和田助氏が、池尻で北朝軍と戦っています。

このように南朝軍と北朝軍が合戦を繰り返した市域には、軍事拠点となる城がありました。狭山池のある谷底の低地をはさんで互いに向かい合う池尻城と半田城です。

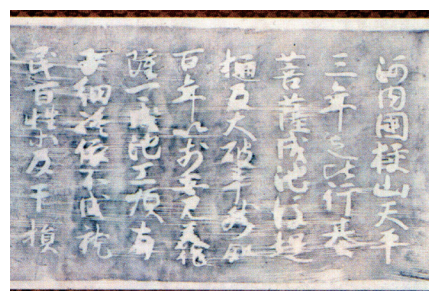


図 38 「狭山池西樋銘文」拓本（行基の部分）

③ 戦国時代

○安見宗房の幻の狭山池改修

戦国時代の狭山に関する出来事として、永禄年間（1558～1570）に安見宗房という武将が狭山池の改修工事に着手したものの未完に終わったという伝承が残されています。宗房は、河内守護である畠山氏のもとで守護代を務めていた遊佐長教に仕えていました。



図 39 池尻城跡

(4) 近世

① 江戸時代

○慶長の狭山池改修と池守田中家

江戸時代初期の慶長13年(1608)、摂津・河内・和泉で国奉行を務める片桐且元が、豊臣秀頼の命で普請奉行となり、大規模な狭山池の改修工事をおこないます。

このとき、且元のもとで下奉行を務めた人物の1人に、田中孫左衛門がいます。孫左衛門は、狭山池の維持管理や水配給の責任者である池守に就任し、池守田中家の初代となりました。田中家は、江戸時代を通じて狭山池の池守を務めました。歴代の当主は、狭山池に関する膨大な文書・記録を作成し、その保存に努めました。「池守田中家文書」として伝来しています。

○狭山藩の展開

戦国時代に関東を治めた北条氏は、天正18年(1590)に小田原合戦で豊臣秀吉に降伏し、戦国大名としての歴史を閉じます。しかし、その子孫の北条氏規(藩祖)が豊臣家旗本として存続しました。嫡男の北条氏盛(初代)のときに大名へ復帰し、豊臣家が滅亡する大坂夏の陣ののち、北条氏信(2代)が池尻村(本市池尻)へ本拠地を移して陣屋を構築し、狭山藩が誕生しました。

北条氏を藩主とする狭山藩は、江戸時代を通じて数度の所領替えがありましたが、本拠地は変わることなく、明治2年(1869)の廃藩まで12代にわたって存続しました。廃藩後、最後の藩主である北条氏恭は、明治天皇侍従を務めました。

○狭山の村と新田開発

江戸時代の初期、人口増加に対応して米の生産量を増やすために、各地で新田開発が始まります。市域では、寛永18年(1641)に茱萸木新田、元禄8年(1695)頃に大野新田が開発されました。

このうち大野新田は、河内国・和泉国の国境付近にあった未開発地「大野芝」を切り開いた10カ所の新田の総称です。泉北丘陵から北へ延びる南北約8キロメートルの尾根の東側の地域で、現在の堺市東区から本市の南端にあたります。耕作地の開発にともなう住民の移住により、関茶屋・草尾・丈六・西野・高松・山本・岩室・今熊・西山・大野という新田村落が生まれました。

この大野新田を表現した新田開発の絵図が「大野惣絵図」です。北方から南方の開発地全体を見渡すように描き、新田ごとに色分けしています。大坂・堺など北方から来た人が読みやすい文字の方向をもち、堤防に立って溜め池を眺めた時に読みやすい方向で

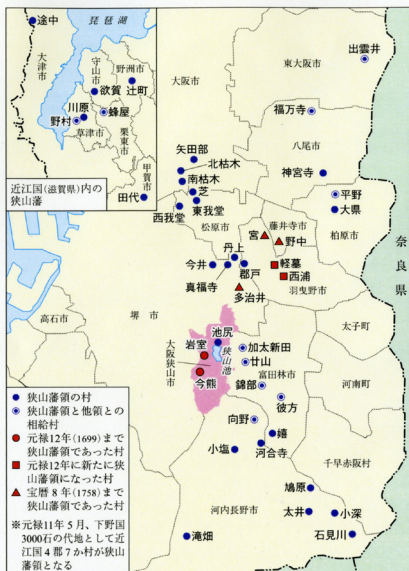


図40 狭山藩所領配置図

文字を記すなど、現地で利用しやすいように作成してあります。
また、高野街道の北方からみて近くを「口」、遠くを「奥」と表現する空間認識が、市内のうち北西端の山本北地区を「口大野」、南西端の大野地区を「奥大野」と記しています。

この新田開発にともなう住民の移住により、江戸時代に山本新田・茱萸木新田・西山新田・大野新田の4カ村が誕生しました。中世から存在した東野・池尻・半田・岩室（池之原）・今熊の5カ村と合わせ、市域の村は9カ村になりました。

これら市域の9カ村は、それぞれ領主が異なり、幕府・大名・旗本の領地として、村単位で支配されました。各村の内部には、庄屋・年寄・百姓代などの村役人がいて、村の運営にあたりました。なお、東野村・岩室村（池之原村）は、一つの村に2人の領主が存在したので、領主別に庄屋がいて、それぞれの領主へ年貢を納めていました。

(5) 近現代

① 明治・大正時代

○狭山村と三都村

明治2年（1869）の狭山藩の廃藩と、明治4年（1871）の廃藩置県を経て、近世から存在した市域の9カ村は、すべて堺県に編入されます。明治22年（1889）の町村制施行により、狭山村・三都村という二つの行政単位が市域に誕生します。東野・池尻・半田の3カ村が狭山村になり、岩室・今熊・山本・茱萸木・西山・大野の6カ村が三都村になりました。その後、狭山村と三都村は、昭和恐慌による不景気での財政力の強化をめざして、昭和6年（1931）に合併し、新たな狭山村となりました。

○南海高野線の開通

明治31年（1898）1月、高野鉄道（現在の南海電鉄高野線）が、大小路駅（現在の堺東駅）―狭山駅間で開業し、多くの人々が汽車を見ようと狭山駅に押し寄せました。鉄道の開通は、堺・大阪方面への通勤・通学、旅行や買い物など、狭山の人々の行動様式や活動範囲を一変させ、沿線地域の近代化を強力に推進する原



図41 新田開発の様子がわかる「大野惣絵図」

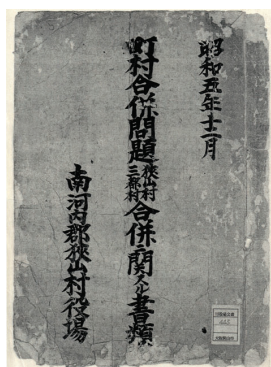


図 42 「町村合併問題狭山村三都村合併ニ関スル書類」
(昭和5年(1930))



図 43 南海高野線狭山駅
(昭和37年(1962))



図 44 並松班の勤労奉仕作業
(昭和14年(1939)頃)

動力になりました。

その後、高野線沿線で開発を進める^{なんかいでつどう}南海鉄道が、昭和14年(1939)に^{さやまじゅうたくち}狭山住宅地(現在の池尻自由丘地区)を開発します。戦後、この狭山住宅地への移住者が中心メンバーとなり、文化向上で復興をめざす文化運動を狭山村で展開しました。

○大野ぶどう栽培の開始

本市大野の特産品「大野ぶどう」の栽培は、大正5年(1916)に始まりました。当時は、^{しゅうかく}収穫したブドウの木箱を^{てんびんぼう}天秤棒で担ぎ、堺旧市街の市場で販売しました。よく売れたので、帰り道の足が軽かったと伝わっています。

② 昭和・平成

○戦時下の狭山

昭和12年(1937)に日中戦争が始まり、昭和16年(1941)12月からアジア・太平洋戦争へ拡大しました。狭山村では、多くの^{おもむ}人々が戦地へ赴くとともに、^{しよくりょう}勤労奉仕や配給・食糧増産による戦争協力が求められました。昭和19年(1944)に空襲の続く大阪市からの^{がくどうしゅうだんそかい}学童集団疎開の受け入れ地になり、昭和13年(1938)開園の^{ゆうえん}狭山池遊園がイモ畑として利用されました。

○町制施行とニュータウンの開発

狭山村は、昭和26年(1951)に^{ちやうせいしこう}町制施行し、^{さやまちょう}狭山町となりました。その後、大都市の人口密集と住宅不足が深刻になり、^{こうがい}郊外に大規模住宅地(ニュータウン)が開発されていきます。

狭山町では、町制10周年の昭和36年(1961)に、南西部の丘陵に大規模住宅地(狭山ニュータウン)を新設する計画が立てられました。狭山町と南海電鉄が協力し、昭和42年(1967)に造成工事が始まりました。入居開始の昭和44年(1969)頃には、狭山町の各校区でも宅地開発が増えます。その結果、狭山町では、人口が昭和35年(1960)の9,648人から昭和55年(1980)の46,508人へと、20年間で5倍近くに増えました。この時期に、小中学校・公共施設や道路・上下水道などの都市基盤が整備され、狭山町の都市化が急速に進みました。

○市制施行

狭山町は、昭和60年(1985)の^{こくせいちやうさ}国勢調査で初めて人口が5万人を超え、^{しせいしこう}市制施行に向けて動き出します。昭和61年(1986)には、^{しめい}新しい市名を公募しました。「河内狭山市」が最も票を集

めましたが、審議の結果、「将来の「狭山」を展望し、古い国名ではなく「大阪」を名称につけるほうがわかりやすい」として、「大阪狭山市」が新しい市名に選ばれました。昭和 62 年（1987）に町議会で市制施行を決議し、同年 4 月 25 日付の官報で 10 月 1 日の市制施行が告示され、大阪狭山市が誕生しました。



図 45 狭山ニュータウン第1期
造成工事
(昭和 43 年 (1968))



図 46 開市式でのテープカット
の様子
(昭和 62 年 (1987))

